

第 629 回：問題設定を試みる（1）（DM）

みなさま、こんにちは。LA 毎週月曜 14:00~17:00 担当、博士課程（後期）の DM です。今回からは、実践的な問題設定について、複数回に渡って解説していきたいと思います。そして今回は、わたくし DM 自らがレポートの問題設定を行っていきます。

まずは、主題からであれ、調査対象からであれ、何に関するレポートを書くかを決めていきます。前回もお伝えした通り、問題設定とは、具体的に分析したい調査対象と、その分析を通じて明らかにしたい主題とを決めていく作業のことです。授業課題のレポートであれば、基本的には、授業内容と関係のある主題、或いは対象を選んでレポートを書くこととなるでしょう。

とはいえ、結局は、自分の関心に沿って、主題・対象は決めていくことになると思われます。というのも、授業内で指定されるレポートの課題は、大抵の場合、かなり大雑把だからです。たとえば「19 世紀フランス文学に関する 4,000 字程度のレポートを提出せよ」という課題が与えられたとします。有名な調査対象だけでも、スタンダール、バルザック、ユーゴー、フローベール、ボードレール、ゾラ、モーパッサン、ランボー、マラルメーなどの作家を選べばいいというのでしょうか！？

そういうわけですから、何はともあれ、自分の関心を軸に、すなわち自主的に、問題設定をしていくという意識が大事かと思われるわけであります。結局のところ、関心を持ってないと、データに対して直感が働かないので、むしろそっちの方が非効率的なのです。

今回の私のレポートの場合は、調査対象か

ら決まっていきました。私がレポートの調査対象にしたのは、埴谷雄高という小説家が書いた、『死霊』という小説です。この連載は授業ではないので、何の制約もないままレポートの問題設定をしていくことになるわけで、それで悩んでいました。そんな中、ちょうど古本屋に立ち寄ったときに、この小説を見つけて、ちょっと読んでみて面白かったので、買ってから家で読んでいたのです。

そうすると、何とも印象的な場面が見つかったのです。主人公の三輪与志という青年が、「俺は俺である」と断言するのを、何故か妙に嫌がっているという、そんな場面が語られていたのです。ちょっと引用してみましょう。

「それは一般的に言って愚かしいことに違いなかったが、『俺は——』と呟きはじめて彼は、『——俺である』と呟きつづけることがどうしても出来なかったのである。敢えてそう呟くことは名状しがたい不快なのであった。」（埴谷 2003:162）

「そうなの？」というのが、私の最初の感想でした。これが自己否定なら、まだ分かりやすい。これが、自分が「俺」という言葉に規定されるという束縛感でも、まだ分らないくはない。とはいえ、ここで語られている「不快」は、どうにも、そういうものとは少し違っているように思われたのです。少なくとも、それに留まるような「不快」ではないらしい。

それで私は、こう思ったわけです。「この「不快」を主題、『死霊』を対象にするってのは、どうだろう？」

というわけで、今回の LA 通信はここまでです。次回は、引き続き、DM による問題設定の実践例を報告して参ります。みなさま、

第 629 回：問題設定を試みる（1）（DM）

何とぞよろしくお願いいたします。

引用文献

埴谷雄高『死霊』I（講談社文芸文庫）、講談社、2003 年。※版は別ですが、外大図書館にも所蔵されています：埴谷雄高『死霊』（埴谷雄高作品集 1）、河出書房新社、1971 年：N918.68=10=1、書庫 1F（開架）

埴谷雄高、椎名麟三『埴谷雄高；椎名麟三』（現代の文学 3）、講談社、1973 年：N918.6=4=3、書庫 1F（開架）

埴谷雄高、藤枝静男『埴谷雄高・藤枝静男集』（筑摩現代文学大系 74）、筑摩書房、1978 年：N918.6=5=74、書庫 1F（開架）